

キエフからの欧米左翼への手紙 Taras Bilous

## A letter to the Western Left from Kyiv

<https://www.opendemocracy.net/en/odr/a-letter-to-the-western-left-from-kyiv/>

2022年2月25日 午後5:20

私はこの手紙をキエフで砲撃を受けながら書いている。

最後の瞬間まで、私はロシア軍が全面侵攻しない事を望んでいた。今はただ、米諜報機関に侵攻の情報をリークした人々に感謝するだけだ。

昨日、私は半日の間、領土防衛隊に加わるべきかどうか考えていた。その日の夜、ウクライナのヴォロディミール・ゼレンスキー大統領は総動員命令にサインし、ロシア軍は進軍してキエフ包囲の準備を整えた。私はそれで決心したのである。

しかし、兵務に就く前に、ロシアのウクライナ侵略に対する欧米左翼の反応について私がどう思っているのかは伝えておきたい。

まず最初に、私は今、ロシア大使館前でピケットを張っている左翼の人びとに感謝したい。たとえ、ロシアがこの戦争における侵略者である、と言う事を理解するには、しばしの時間を要する人たちであったとしても。

ロシアに圧力をかけて、侵略をやめさせ、軍隊を撤退させようとしている政治家たちにも感謝したい。

また、ロシア侵略に先立って、私たちを支援し、その声を聴くために派遣団を送ってくれた英国・ウェールズの議員たち、労働組合員、活動家たちに感謝する。

また、イギリスのウクライナ連帯キャンペーンの多年にわたる支援にも感謝する。

この手紙はその他の欧米左翼について書いたものである。例えば DSA（アメリカ民主社会主義者党）ニューオーリンズ支部のように「NATO によるウクライナ侵略」を空想し、ロシアの侵略が見えないような人々の事である。

あるいは、ただの一言もロシアを批判しない恥ずべき声明を発表した DSA 国際委員会（この声明を批判した米国の教授や活動家達、Dan la Botz、その他の人びとに感謝したい）の事である。

あるいは、ウクライナが「ミンスク合意」を実行しなかったと批判するが、ロシアといわゆる「人民共和国」による合意への違反には言及しない人びとの事である。

あるいは、ウクライナにおける極右の影響を強調するが、「人民共和国」における極右の存在については気づかず、プーチンの保守的、民族主義的、権威主義的政策を批判するのを避ける人びとの事である。

こうした事は欧米の「反戦運動」において、左翼に対する批判者が通常は「キャンピズム」（陣営主義）と呼んでいるより大きな現象の一部なのである。英国系シリア人の作家で活動家の Leila Al-Shami は、より激しい言葉でこれを「阿呆どもの反帝国主義」と呼んでいる。

もしまだ未読なら、彼女が2018年に書いたすばらしいエッセイを読んで欲しい。わたしはここで、その中心的なテーマだけを繰り返しておきたい。欧米の「反戦」左翼のシリアにおける戦争に関わる活動の多くは、戦争をやめさせる事とは何の関係もなかった。それは欧米の介入に反対するだけで、「合法的に選出された」シリアのアサド政権への態度については言うまでもないが、ロシアとイランの関わりについては無視、あるいは支持さえしたのである。

「多くの反戦組織がそのロシアとイランの介入に関する自らの沈黙を『主要な敵は欧米本国にいる』と言って正当化した」と Al-Shami は書いている。「こうした口実によって、戦争を実際に推進しているのが誰なのか、を判断するための真剣な権力分析がなされる事がなかったのだ」。

不幸にして、同じイデオロギー的クリシェ（決まり文句）がウクライナについても繰り返された。今週はじめから、ロシアが「人民共和国」の独立を承認した後でさえ、米国の左翼雑誌 jacobin のライター Branko Marcetic は、ほぼ米国批判一辺倒の記事を書いていた。プーチンの意図については、彼は、ロシアの指導者は「穏やかな野心とも言えないようなものを示した」と述べているだけだ。本気でそんな事を思っているのか？

私は NATO の味方ではない。冷戦後、NATO はその防衛的機能を失い、侵略的政策を主導するようになった事も知っている。NATO の東方拡大が、核軍縮や共同防衛システムの形成を目指した努力を損なってしまった事も知っている。NATO は国連や欧州安全保障協力機構の役割を周縁化しようとし、これらを「非効率な組織」として貶めている。しかし、私たちは過去に帰ることはできないし、現在の環境に適応しながら、この状況から脱出する道を探さねばならないのだ。

欧米左翼はいったいどれだけ米国の非公式なゴルバチョフへの NATO に関する約束（1インチたりとも東方へは拡大しない）を持ち出した事か。またウクライナの主権を保障した1994年ブタペスト覚書を持ち出した事か。欧米左翼はどれほど頻繁にロシアー世界第2位の核兵器大国一の「正当な安全保障上の懸念」を支持した事か。そして、ウクライナー米国とロシアの圧力の下で、最終的には2014年にプーチンによって踏みにじられたブタペスト覚書という一片の紙切れと引き換えに核兵器を放棄した国一の安全保障上の懸念についてはどれだけ思い出した事があるのか？ NATO の東方拡大によってもたらされた変化の最大の犠牲者はウクライナであった、という考えは欧米で NATO を批判する左翼の頭に浮かんだ事さえあるのか？

何度も何度も、欧米左翼はロシアへの批判に対しては米国によるアフガニスタン、イラク、その他の国々への侵略を持ち出してきた。もちろん、これらの国々のことは議論されるべきだ。でも一体全体、どのようにして？

左翼であるならば、2003年にはイラクについて他の国々は米国に対して十分な圧力をかけなかった、と議論すべきだし、今、ウクライナについてロシアへ圧力をかけるな、と論じるべきではないのだ。

## 明らかな誤り

しばらくの間、2003年に米国がイラク侵略を準備していた時、ロシアがこの数週間のよう米国と同様、戦争エスカレーションの脅威をもって行動したと想像してほしい。その状況において、ロシアの左翼が「主要な敵は欧米本国にいる」という教条にしたがって行動したらどうなっていたであろうか？ロシアの左翼は、ロシア政府によるこの戦争の「エスカレーション」を「ロシアは帝国主義間抗争に危機をもたらすべきではない」といって批判したであろうか？誰の目にもこのケースにおいて、そのような行動は誤りだと分かるだろう。なんでこんな事がウクライナに対する侵略においては分からなかったのだ？

もし、米国とロシアが合意して中国に対する新たな冷戦を始めたら、それがわれわれが本当に望むことなのか？

今月、雑誌 *jacobin* の少し前の号で、Marcetic は Fox ニュースの Tucker Carlson が「ウクライナ危機」について言っている事は「完全に正しい」とまで言い切っている。Carlson は「ウクライナの米国にとっての戦略的価値」に疑問を呈したのである。Tariq Ali ですら、*New Left Review* においてドイツの Kay-Achim Schonbach 提督の発言を肯定的に引用しているのである。提督は言う。プーチンのウクライナへの対応を「尊重」することは、ロシアが中国に対する有効な同盟国となる可能性を考えれば、「ローコスト、あるいはノーコスト」である、と。君たちは真剣にそんな事を考えてるのか？もし、米国とロシアが合意に達して、中国に対する新たな冷戦を始めたとしたら、それがわれわれが本当に望むことなのか？

## 国連の改革

私はリベラルな国際協調主義の味方ではない。社会主義者はこれを批判すべきである。しかし、それは帝国主義国家間での「権益圏」の分割を支持すべきだ、と言う事は意味しない。二つの帝国主義の間の新たなバランスを模索するのではなく、左翼は国際的な安全保障秩序の民主化のために闘わなくてはならない。われわれには国際的な安全保障についてグローバルな政策とシステムが必要である。後者は存在する。国連である。確かに多くの欠陥を抱えており、正当な批判にさらされている。しかし、批判はそれを拒否するためにも、それを改善するためにも、どちらの方向でも可能なのだ。国連に関しては、われわれは後者でなくてはならない。われわれには国連改革と民主化のための左翼のヴィジョンが必要なのだ。

もちろん、それは左翼が国連の決定を全て支持すべきだ、と言う事は意味しない。しかし武力紛争の解決における国連の役割を全般的に強化していく事で、左翼は政治・軍事同盟の

重要性を低下させ、犠牲者の数を減らす事ができるだろう。(以前の記事で、どうすれば国連平和維持活動がドンバスの紛争解決に役立ったか、について私は書いた。不幸にして、今ではもうその記事の妥当性は失われた。) 結局、われわれは気候危機やその他のグローバルな問題を解決していくためにも国連を必要としている。多くの「国際主義左翼」が国連の利用について消極的なのはひどい間違いである。

ロシア軍のウクライナ侵攻の後で、Jacobin の欧州編集者である David Broder は、左翼は「米国による軍事的対応に反対した事について一切弁明の必要はない」と書いた。どのみち、バイデンは何回も言明しているが、米国には軍事介入の意思はなかったのだが。しかしながら、大多数の欧米左翼は、「ウクライナ危機」への対応を公式化するにあたって完全に大失態をさらした。と言う事は正直に認めるべきである。

### これからの展望

最後に私自身の事と、私の考える展望について述べて、この短い手紙を終えたい。

過去 8 年の間、ドンバスでの戦争はウクライナの左翼を分裂させた主要な問題であり続けた。皆が個人的な経験とその他の要因に影響されながら、それぞれの立場を取った。だから、別の人がこの手紙を書いたら、また違った書きぶりになっただろう。

私はドンバスの生まれだが、ウクライナ語を話す民族主義者の家庭に育った。私の父は、ウクライナ経済の崩壊とかつての共産党指導者たちが富裕層になっていくのを目にしながら、90年代は極右に参加した。父は80年代半ば以降は共産党指導部と闘っていたのである。もちろん、父は反ロシアであったが、同じく反米でもあった。私は今も2001年9月11日の父の言葉を覚えている。父はテレビでツイン・タワーが崩落していくのを見て、これをやった人々は「英雄」だ、と言ったのである(父は今ももう、そう考えていない。今では9・11は米国の自作自演だと信じている。)

ドンバスでの戦争が2014年に始まった時、父は義勇民兵大隊の一つに参加し、母はルハンシクへ逃げ、祖父母は「ルハンシク人民共和国」の支配下に置かれた自分たちの村に留まった。祖父はウクライナの「ユーロマイダン」革命を非難していた。祖父は「ロシアに秩序を再建した」(と祖父は言う)プーチンを支持していた。それにも関わらず、私たち家族は互いに助け合い、話(政治についてではなくても)をしようと努力していた。私は皆を理解しようとした。何ととっても、私の祖父母はその人生の全てを集団農場で過ごしたのである。父は建設労働者であった。人生は彼・彼女らにとって優しいものではなかったのだ。

2014年の出来事—革命とそれに続く戦争—によって、私は殆どのウクライナの人びとは反対の方向に押しやられた。あの戦争によって私の中で民族主義は死んだ。そして私は左翼になったのである。私は民族ではなく、人類にとってのより良い未来のために闘いたいと思った。ソ連崩壊がトラウマとなっている私の両親は、私の社会主義的な考えを理解しなかった。父は私の「平和主義」を見下しているし、私がファシストへの抗議行動で「極右アゾ

フ大隊を解体せよ」というプラカードを掲げてから後は、私たち親子は不愉快な会話を交わすようになったのである。

2019年春にヴォロディミール・ゼレンスキーが大統領になった時、私は今まさに展開中の破局が避けられるのでは、と希望を持った。なんだかんだ言っても、ドンバスでの和平プログラムを公約して選挙に勝ち、ウクライナ人だけでなくロシア人の間でも人気のタレントであったロシア語を話せる大統領を悪魔呼ばわりする事は難しい。不幸にして私は間違っていた。ゼレンスキーの大統領選での勝利は、多くのロシア人のウクライナに対する態度を変えたが、それは戦争を止める事はなかったのだ。

この数年、私はドンバスでの戦争の和平プロセスと両陣営における民間犠牲者について書いてきた。私は対話を促進しようと努力した。しかし、今、それは全て水泡に帰した。もう歩み寄りはないだろう。プーチンは思うがままに計画すればよい。しかし、もしロシアがキエフを占領して政権を樹立しても、私たちは抵抗するであろう。ロシアをウクライナから撤退させ、全ての犠牲と破壊の対価を支払わせるまで、闘いは続くであろう。

故に私の最後の言葉はロシアの人びとに向けられたものだ。急いでほしい、そしてプーチン政権を打倒してほしい。それはあなた方の利益であるだけでなく、私たちの利益でもあるのだ。

-----  
編集者注（2022年3月17日：「プーチンの意図については、彼は、ロシアの指導者は『穏やかな野心とも言えないようなものを示した』と述べているだけだ。」という一文については英訳の間違いを訂正した。【元の英訳は分からないが、訂正前の文を訳したと思われるある訳では、「それがプーチンの行動の事になると、彼はロシアの指導者は『決して恵み深くはない野心の合図を見せた』と認めるところまでしか進まなかった」となっている。英訳では「行動」を「意図」に差し替えたようだ。】また、最初の出版時には【父が2014年に参加した】義勇民兵大隊は「極右」と記述されていたが、どこの大隊だったかは重要な問題ではなく、またそれははっきり極右という訳ではなかった。そのため、大隊の名称と説明については削除した。また著者の求めに応じて、何人かの他の欧米の左翼コメンテーターに向けられていた非難については削除した。）

（翻訳：新山 力）